

四体心経の筆者

細 貝 保 夫

伝空海筆『四体心経』（『破体心経』ともいう）には、広隆寺所蔵本（以下広ということとする）と書道博物館所蔵本（以下博ということとする）とがある。

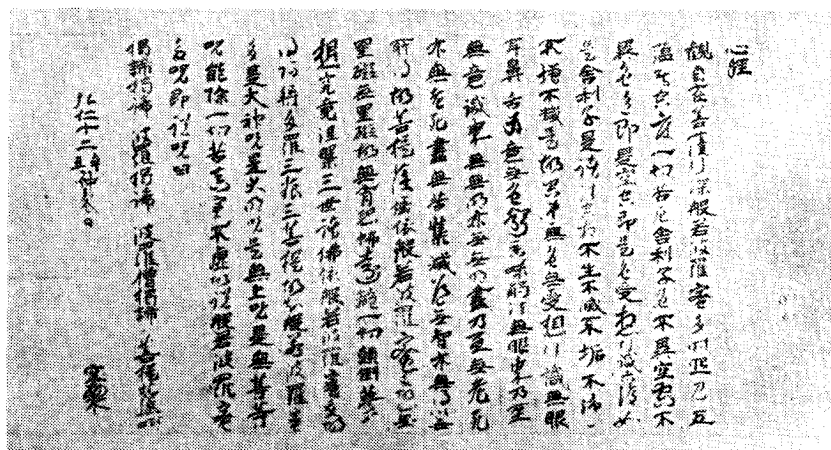
字形は奇態を呈している上に、用筆に独得の癖がある。また、字形にも点画にも変化が少なく、他の空海の真筆とは書風を大きく異にしている。それ故、別筆説をとる先学がほとんどで、私も別筆と考えている。

しかし、『墨美』第二一八〇号の「伝空海書蹟再検討（破体心経）」に飯島太千雄氏が新たに空海真筆説を提示された。

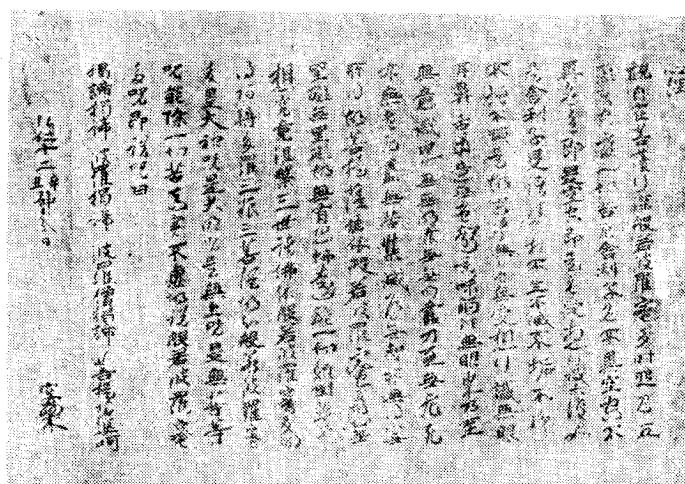
飯島氏が空海の真筆と認めるおもな理由は、広の書法上の特徴をあげて、一、空海の得意とした破体を用いている。二、楷・行・草に隸を加えて全体的調和をもった表現を行うのは、至難であるが、それを果し得ている。三、隸書と調和させるため、楷・行・草各体に独創的な体を案出している。四、草書の、本来の発生理由を無視して、簡略化した単一の字体の如く扱うことによって、楷・隸との調和を計る。五、草書の中に、梵字の書法を取り入れ、一見梵字と見まがうばかり

の独特の体を創始している。六、起筆は、隸書、あるいは隸意のあるものは藏鋒で、他は露鋒と使いわけている。終筆は、隸書には破磔、時には逆出にするなど、高度な用筆法である。八、基本的に運筆は直筆であるが、処々筆管を進行方向に倒した府（俯）仰法によっている。直筆・府（俯）仰法は、空海の真蹟に共通する、個々の書法である。九、用いた筆は、梵字を書くための木筆かと想像される。の九項目を提示している。更に『三十帖策子』中の空海の真筆と考えられる第二十七・二十九帖の梵字と共通書法の文字四例九字、及び同字比較二十八例七十二字を擧出し、先の九項目の書法的特徴と合わせて、空海の自筆本たることを自明であるという。

実は広・博とも用筆法、結構法、線の肥瘦、運筆の軌跡、字間の広狭にいたるまで全く同一なのである。しいて相違点をあげるならば、広は、収筆のササクレだった線、送筆部の筆の割れによる副線が顕著であり、博は、料紙が煤けて見にくく、漫滅がはなはだしく古く感じられるといった違いがある程度である。それ故、飯島氏の広の論拠は、そっくり博にもあてはまるのである。



広隆寺所蔵本



書道博物館本

私は、飯島氏が同字比較に用いた空海の真筆のうち、『大日経疏要文記』（第二紙以下の筆者については、『国士館大学文学部創設二十周年記念論集』収載の拙稿「大日経疏要文記の筆者」を参照）、『益田池碑銘』『御物本書譜』『与越州節度使請内外経書啓』は空海の真筆とは認められないものである。すなわち、これらを含めての同字比較には問題があるといわざるを得ない。また、かりにこれらを空海の真筆と認めて比較したとしても、『墨美』第二一八〇号収載の擢出例程度の類似性及び分析程度では真筆と判定するのは無理であろうと考えている。空海の真筆と限らなくとも、空海在世当時の書は晋唐風の影響を受けているのである。

空海の真筆と模写本とは必ず明確な相違点があるはずである。

私は広も博も、空海の真筆に共通した独特の用筆法が顕著でなく、空海風が見られても字形の崩れた空海風が認められるだけであり、生彩や筆勢にも欠ける。

また、巧妙さがなければかりか、洗練されていないので、とうてい空海の真筆とは認めがたい。

そこで再検討にあたってまずはじめに同字比較をするが、大切なのは、一、空海の真筆として確かな筆跡を用いること、二、書写年時を追って書風等に変遷があるか注意することである。それで同字及び一部同じ箇所のある文字を擧出したのは、延暦二十四年（八〇五）・大同元年（八〇六）すなわち空海在唐中の三十二・三十三歳の時に書写した『三十帖策子』第十四・二十・二十二・二十三・二十六・二十七・二十九帖、弘仁元年（八一〇）から同四年、空海三十七歳から四十歳の時に書写したと考えられる『風信帖』、弘仁三年十一・十二月の、空海三十九歳の時に書写した『灌頂歴名』及び同四年三月の歴名の一部（別筆箇所及び筆者については、国士館大学国文学会『国文学論輯』第六号収載の拙稿「灌頂歴名の再検討」を参照）、弘仁四年、空海四十歳の時、書写したと考えられる『金剛般若経開題』、弘仁十二年、広・博と同じ年記のある、空海四十八歳の時に書写した『真言七祖像』行状文の中からとする。そして『四体心経』は広・博とも同一であるので、文字のより鮮明な広より擧出することとする。

凡 例

一、別表A〰〇の右側の図版が広隆寺所蔵『四体心経』で、左側の図版が空海の真筆である。

二、別表A〰〇の左側の図版下及び傍の略称・数字はそれぞれの所在

位置を示したものである。〔『三十帖策子』……三（第何帖）、『風信帖』……風（第何通）、『灌頂歴名』へ弘仁三年十一月の歴名……灌・一、弘仁三年十二月の歴名……灌・二、弘仁四年三月の歴名……灌・三、『金剛般若経開題』……開、『真言七祖像』行状文へ龍猛……龍、龍智……智、金剛智……金、不空……不、善無畏……善、一行……一、惠果……恵〕

一、書法面から

別表Aの分析

「実」「多」「諸」「見」「行」「能」「智」「子」の各文字は空海の壮年から老年に至るまで書風の変化が全くなく同一であり、空海の書と広とは全く別傾向を呈している。また「皆」「知」「香」「離」の各文字は老年の書写になる『真言七祖像』行状文中より擧出できなかったが、恐らく壮年から老年まで書風の変化がなく同一であったことと考えられる。それ故、空海の書と広とは全く別傾向を呈している。空海の書法及び書風の変遷過程から見ても空海が広のような書を書くことは不審である。

「能」字は、空海は好んでこの草書体を用いている。しかし『三十帖策子』を見ると一目瞭然であるが、周辺が入念な楷書に近い行書で書いてあっても、「能」字はこの草書体を用いている。空海の筆癖と考えられる。それ故、空海は広のような別傾向の書は書かなかったと考えられる。

「智」字は、空海の書は下部が「日」になっているが、広は「日」に書いて、両者別傾向を呈している。

「子」字は、空海の書は第一筆の部分が小さく結構し、縦長になっているのが特徴である。壮年から老年に至るまで変化がない。しかし広は起筆を逆筆にして扁平な字形になっている。また第三筆の収筆の破礫が長くて力強く、空海の書は顕著であるが、広は非常に短くて筆勢がない。それ故、広は別筆の可能性が大であると考えられる。

「皆」字は、広は「居」字の草書体になっている。『三十帖策子』『金剛般若経開題』は正しく書いていて、広でこのような誤字を書くかどうか不審である。

「知」字は、空海の書はいずれも縦長になっているが、広は文字の中心が左側に移動して横広の字形になっている。また、「フ」部分の転折の筆の抑揚のつけ方も両者相違している。

「香」字は、空海の書は周辺の文字が、比較的な念に書いた楷書に近い行書であっても、忽卒に速く書いた草書であっても、下部は「日」にしており、これ以上簡略にしないのが特徴である。広は下部の「日」を、左右点にしている。

「離」字は、草略法に相違が見られ、偏に連筆の軌跡の相違及び抑揚のつけ方に相違があり、両者別傾向を呈している。これは忽卒に速く書くか、あるいはゆったりと入念に書くかの書く態度の違いによって生じた相違でなく、筆者の筆癖の違いによると考えられる。

「界」字は『真言七祖像』行状文中より擲出できなかったが、『三十

帖策子』及び『灌頂歴名』中より擲出して、行書から草書へ移行する場合、どう字形が変化するか示したが、広のような上部を「田」でなく「由」にした結構法は空海の書からはでてこないと考えられる。

「空」字は、空海の書は、書写態度の違いによって字形が相違し、また書写年時が相違しても字形に変化が見られる。しかし広のような字形は空海の書からは見出し出せない。それ故、空海は広のような草書体は書かなかったものと考えられる。

「真」字は、草書であるが、起筆の短い縦画はどんなに簡略化されても、省略されることはない。広のは明らかに誤字である。三十二・三十三歳から四十歳まで正しい草略法で書いていた空海が、広のような誤字を書くかどうか不審である。

「心」「恐」「意」「想」と「恐」「想」「意」「慧」「愚」は、空海の書と広とは結構法・用筆法が全く相違している。空海の書から広のような第二筆と第三筆とを切り離れた書き方は見出し出せない。それ故、空海は広のような書き方はしなかったものと考えられる。

〔B〕

「在」「有」字とも空海の書は、左払いが長く脚部まで伸びている。この傾向は壮年から老年まで変化していない。ところが、広には、いずれも左払いが短く途中までしか伸びていない。また、同じく隸書風が顕著でありながら、空海の書では破礫がなく、広には破礫があるのは不審である。更に『真言七祖像』行状文と広とは恐らく筆順が相違するものと思われる。空海の書は横画・左払いの順であるが、広は左

払い・横画の順で書いたものと考えられる。同じ年に書かれた両者が、別傾向を呈しているのは広の筆者が、空海でないことの証左である。

〔C〕

ここで「薩」「度」「若」「空」「身」の各字を擢出したのは、みな違った文字であるが、共通傾向が見られるからである。「薩」字は、「立」部分の末画と「薩」の最終画の横画とを比べた場合、空海の書は、壮年から老年まで「立」の末画が短くなっていて変化していないが、広は、それとは反対に長くなっている。

「度」字は、空海の書は、第二画の横画が短く、第四画の横画が長くなっているが、広は反対に第二画の横画が長く、第四画の横画が短くなっている。

「若」字は、空海の書は、『真言七祖像』行状文のように比較の入念に字形を整えて書いた場合と、忽卒に書いた場合とでは字形が大きく変化する。『灌頂歴名』がその好例である。しかし、書く態度が相違しても、その人独得の変らない筆癖があるのである。それは「若」の脚部「右」の第二画の横画にあたる右上りの線の収筆、すなわち「口」の草書に連続する転折の箇所と「口」の草書体「フ」の転折とを比べると、空海のは、どんな字形になっても「口」の草書体「フ」の転折が必ず右側に突き出ている。しかし、広は「右」の第二画の右上りの線の収筆と「口」の草書体「フ」の転折の位置が一直線上に並ぶか、あるいは「フ」の転折が空海の書とは反対にやや左側に突き出る傾向

がある。

「空」字は、両者とも同じような傾向を呈しており、区別できない程よく似ている。しかし、子細に見ると両者の間にはそれぞれ特有な相違点が認められる。すなわち、空海の書は壮年から老年まで、六冠の第四画より脚部の「エ」の最終画の起筆が左側には絶対に突き出ないが、広は左側にやや突き出している。

「身」字は、草書体の第三筆の左払いの線が、空海の書は第一筆の点より低く起筆しているが、広では逆に高く起筆している。また、運筆が、空海の書は軽妙であるが、広は鈍重である。これらの違いはゆったりと入念に書くか、忽卒に速く書くかの書写態度の違いや書写年時の相違による書風の変化によって生じた違いではない。両者は明らかに筆者の筆癖による違いで広の筆者を空海とすることはできない。

〔D〕

「掲」「提」「是」「埤」「相」「除」「可」「呵」と「訶」「何」「未」「味」と「昧」「昧」の各々の文字の縦画または文字の中心が左に傾斜するのが空海の書の特徴である。広のは逆に右に傾斜し湾曲して別傾向を呈している。それ故、これは書写態度の相違や書体の相違、あるいは書写年時の相違による書風の変化の相違ではなく、明らかに筆者の筆癖の違いによって生じた相違点である。

〔E〕

ここに「照」「明」を擢出したのは、違った文字であるが、同一傾向が見られるからである。すなわち、偏の「日」から旁に移行する運

筆の軌跡が、空海の書は「日」の第三画の横画あたりを通過する近道の軌跡をとっている。広は「日」の第二画の横画部分を通過する遠廻りの軌跡を通して、別傾向を呈している。また「日」から旁に移行する連続線の有無についても両者別傾向を呈しており、筆圧のかけ方も相違している。明らかに筆者の筆癖によって生じた相違点であると考えられる。

[F]

ここで「可」「阿」と「阿」「可」「神」「故」「世」「遠」「遠」と「遠」「還」を擧出したのは筆圧のかけ方が相違する例である。「可」「故」「遠」の三字は、草略体の「可」の下半「の」の字形の部分の右上から左下へきて、再び右上に方向を転換した部分が切れているかどうかを見ると、空海の書は力を溜め込んでから強い折れ返しをして連続しているが、広は切れて継がっていない。

「神」字は、空海の書は壮年から老年まで書風に変化はなく、偏と旁とを連続させている。しかし広では偏と旁とを切り離している。また用筆法も両者相違している。

「世」字は、空海の書は、最終画を一筆で書いているが、広は最終画を縦画と横画とを切り離して書いている。また、第二・三画の縦画のそり方も両者別傾向を呈している。これらは明らかに筆者の筆癖の違いによって生じた相違と考えられる。それ故、広の筆者は空海とは考えられない。

[G]

「説」「咒」「道」の各文字は、空海の書は、末画を右側に長く突き出しているため裾広がりになり、文字の概形が台形になっていて安定感がある。広は末画を短めに縮めているので、概形が梯形になって不安定である。

「咒」字は、空海の『三十帖策子』は行書から草書に移行しても、右側の「口」が「ソ」に変化しても、横画はあまり変化しない。広は横画が完全に省略されて「ソ」と「ル」とが連続した形になっている。「道」字は、空海の書は第二画が字丈の二分の一ほどまでしかないが、広は脚部まで到達して非常に長くなっている。それ故、これは筆者の筆癖の違いによって生じた相違と考えられる。

[H]

「夢」「識」「識」と「識」「職」「心」「受」の各字は、空海の書では壮年から老年まで書風に変化が見られない。しかし、広は空海の書に比べて、ある特定の画を右側に長く突き出したり、偏と旁との間を広くあけたりして横広の結構法をとっている。すなわち「夢」字は、「ㄣ」の第二筆を「一」にして右側に長く突き出している。

「識」字は空海の書と違って広は言偏と「音」と戈法との各々の間が、広くあいており、字形が横に広がっている。また、「音」の崩し方が空海の書は「レ・ソ・一・日」の順に書いているが、広は「七(匕)・一・マ」の順に書いており、明らかに別傾向を呈している。

「羅」字は、空海の書は脚部の「糸」と「隹」とが接しているが、広は逆に広くあいている。

「心」字は、空海の書は、第二画を短めに書いているが、広は右側に長く引いている。

「受」字は、空海の書は右払いを「ㄣ」より右にあまり出していないが、広は右払いを特別に長くしている。両者がこのように相違することは筆者が違うからであらうと考えられる。

「切」「得」字の偏の縦画のそり方が、空海の書と広とは別傾向を呈している。いずれも、空海三十二・三十三歳の時書写した『三十帖策子』と四十歳の時に書写したと考えられる『金剛般若経開題』との間に書風の変化がなく同一であるので、もし広の筆者が空海なら同一傾向の書を書くはずである。また「切」字は、第一画から二画への連続線の有無及び隣の左払いの長さの相違、「得」字は、隣の頭部と脚部の大きさの比率などに注目すれば、空海の書とは別筆であること明白である。

ここは破磔のある文字（「生」「仁」「異」「三」と「生」「仁」「二」「位」「三」）の「一」を中心に横画の角度が、空海の書は水平か、やや右肩下がりになっている。そして起筆に近い送筆部で大きくうねらせて、更に筆を吊り上げて線を太くし破磔を右上に勢いよく撥ね上げている。しかし広は「一」の角度が、空海の善無畏・一行行状文よりみなやや右肩上がりになり、線の肥瘦及び運筆の緩急抑揚の変化があまりない。また収筆の破磔も短めで、撥ね上げの方向も相違している、空海の書とは別傾向を呈している。

【K】

縦画（「仲」と「滞」）の収筆は、同じ年に書かれた『真言七祖像』善無畏行状文は縦画を長く引き、収筆に墨点をとどめる垂露の法になっているが、広は収筆がV字形に右上に撥ね上げていて相違している。このような書き方は『真言七祖像』行状文中に全く類例を擧出できないものである。模写本である『益田池碑銘』の中の「仲」字の方が垂露の法によっており、空海風を感じさせる。

【L】

末画の曲がり（「老」「死」「絶」「見」）は、『真言七祖像』一行行状文では龍尾を右上斜めに長くひいている書法が顕著であるが、広では、その独得な書法が不明瞭である。両者は同じ年記があるが、広の筆者が空海ならその書法が顕著に表われるはずである。

【M】

広と同じ年記のある空海の『真言七祖像』善無畏行状文の「数」「誘」字は、収筆が意匠的な独得な収筆である。しかし、広の「故」「聲」字の収筆は、空海の書とは傾斜角度が違い、筆力筆勢も乏しい。同じ年記を有しながら、このように両者用筆法を異にするのは明らかに別筆であるからであらうと考えられる。

【N】

ここに擧出した「菩・諦・若」と「容・故・引」の各文字の「口」を逆三角形に作っているのが独得である。一見すると両者とも同じように見えるが、空海の書は、左辺と右辺の二辺が背勢を呈している。

しかし、広は、背勢ではなく直線的に書かれている。また「口」の第一画と第二画の起筆との接筆の位置、用筆法が相違する。これは明らかに筆者が相違することの証左である。

○

「經」字は、両者とも同じ年記を有するが、空海の『真言七祖像』一行行状文は旁を「一・ハ・エ」の順に書いているが、広では「一・ハ・一・二」あるいは「一・ハ・二・一」のいずれかの順で書いたものと考えられ、両者相違している。

「滅」字は、空海の書では、一水に書いているが、広は、三水となっていて両者相違する。

「觀」字は、空海の書は、偏を「觀」字の崩し字にしており、広のような「觀」字は擢出できなかった。空海は終生、略字は用いなかったものと考えられる。

「般」及び「槃」字は、傍の部分が空海の書では「口」と「又」とになっているが、広は「口」と「又」とになっている。また「槃」字は広は「舟」と「口」とを並列させその中央下に「又」を書き、その下に「ホ」を書いており、空海の書とは相違する。

「鼻」字は、空海の書では頭部が「目」となっているが、広は「白」となっていて両者相違している。

「觸」字は、空海の書は楷書から行書になっても傍の「蜀」はほとんど省略されずそのままである。しかし広の角偏は空海の行書より楷書的であるが、傍は「虫」が「ム」になるほど極端に省略されている。

また空海の書では楷書も行書も、旁が偏に比べて下がった結構になっているが広とは相違している。

「帝」(「諦」と「諦」)「帝」字は、空海の書は「冫」を横広にし下の「巾」を逆に引き締めて狭くしている。また上部の間隔を広くした結構法をとっているが、広は反対に「冫」も「巾」も同じように横広にし、上部の間隔はつめて狭くしている。

「色」字は空海の書は第二筆の斜画が第一筆の収筆より左側に出ないが、広は第二筆の斜画が左側に長く突き出ていて、更に第三筆の横画の部分が空画になっており、空海の書とは別傾向を呈している。

「無」字は、空海の書は必ず第三画の横画が四本の縦画の外側(左右)に突き出ており、第八画の縦画が長い横画と交叉して下へ突き抜けている。しかし、広は、それとは全く別傾向を呈しており、字形も巧妙とはいえない。

「怖」字は、空海の書は傍の筆順が「ノ・一・巾」の順に書いているが、広は、横画が極端に短くなっているので、恐らく「一・ノ・巾」の筆順で書いたことと考えられる。また、広が「巾」を巾偏にしているのも不審である。

二、文献面から

広・博には偈から半行隔てて、界の上に「弘仁十二年辛仲冬日 空丑 祭」と年記が書いてある。

『真言七祖像』善無畏行状文の奥書には「弘仁十二年九月七日」

の年記がある。しかし「年」字の草書体の第一筆の残画をとどめるのみで、以下は損傷剝落がひどくて見えない。また、一行行状文の奥書には「弘仁十二季九月六日書」の年記がある。これも「季」字の第二画の収筆の破綻及び「九」字の左払いの一部が残存するのみで、あとは損傷して見えない。幸いにもこれらの損傷剝落した箇所は『略付法伝』により補填できる。『略付法伝』の記載が正しいとすると、**広・博**と善無畏・一行行状文とは年記の書き方に相違があることになる。**広・博**のように干支を横に並列させる表記は、空海の真筆及び模写本には見られない。そこで空海在世当時に年号の干支を横に並列させた用例があるか、あるいはいつ頃から行われたのかを『古写経大観』『石山写経選』『古文書時代鑑』『高野山古経聚粹』等で調べてみた。中でも『古写経大観』収載の『119華嚴経卷第十』の奥書に「始自永久五年丁酉二月十五癸酉至于同年四月十五日」が最も古い例である。ついで古いのが同書収載の『120摩訶般若波羅蜜多経』の奥書で「元永二年己丑五月廿五日庚午時許」と見えているものであるが、いずれも空海時代をはるかに下がり、院政時代のものばかりである。ただ『高野山古経聚粹』収載の正智院所蔵『三、文館詞林卷第六九五』の奥書が、**広・博**と同じ年記であるが「校書殿写弘仁十四年（處）□次癸卯二月為冷然院□」と干支が縦書きとなっている。

『平安遺文・題跋篇』には、更に古い例が見えている。しかし、ここに収載の典籍の奥書は、その一々について原本より採訪したもののばかりではないとあるので、果して原本どおりかどうかかわからないので

一応参考までに掲げてみることにする。それは「天応二年壬戌三月 小世磨」の奥書を有する田中勘兵衛氏所蔵『大般若波羅蜜多経』（二巻）で、空海在世中のものである。ただこれらは、**広・博**とは違って、いずれも干支の上に「年」字がある。

広・博と同じ「年」字のない表記としては「天喜六戊戌七月二十六日甲午」の奥書を有する龍光院所蔵『大毘盧遮那経』（七帖之内第一・七帖）が最も古い例である。

空海在世中の「天応二年壬戌三月 小世磨」の奥書を有する『大般若波羅蜜多経』が、たとえ原本どおりで干支を横に並列した表記であったとしても、空海は年記のある善無畏・一行行状文と**広・博**とを何故に異なった表記をしなければならなかったか不審である。**広・博**は筆者が空海とは違うからであろうと考えられる。

岸田千代子著『般若心経百卷』に、偈の梵語「ソワカ」の音訳について十二種類あるが、**広・博**の「莎婆呵」は、奈良時代に三例、鎌倉時代に二例、室町時代に一例、江戸時代に一例、その他唐の時代に一例、計八例が見られ、平安時代の用例はないという。ただ奈良時代に三例あるので、平安時代も引き続き用いられたが、偶々その用例が見つからなかったのか、あるいは、平安時代だけは用いられなかったのかわからない。この調査をそのまま信用すれば、**広・博**の書写年時は空海時代でないことになる。

更に**広・博**の筆者を考える上で、当時の『般若心経』が、どのように扱われたかを考えてみる必要がある。

空海は嵯峨天皇宸翰『般若心経』を加持し、また『般若心経秘鍵』を著述して、心経を真言密教中に取り入れたことは周知のことである。また、最澄は『摩訶般若心経釈』、源信は『講讀心経義』を著述して、その教学との関係の追求に努めたといわれている。当時は現代のようにただ写経しただけではないのである。『般若心経』を読んで、仏の教えを知り、仏の教えを守り、更に仏の教えを人に伝えたのである。それ故、空海は、何故に『般若心経』を広・博のような奇態を呈した特異な書法で書写しなければならなかったのか不審である。

広・博は、良い方に解釈すれば空海崇敬者が祖師空海崇敬の念から、空海の書の中でも『真言七祖像』行状文等の特異な書法で書かれたものをヒントにして、崇敬者が「同行二人」のように祖師になりきって『般若心経』を書写し自著「空褒」の法諱まで書写したとも考えられるし、悪く解釈すれば、空海の特異な書法で書かれたものをヒントにして偽作したとも考えられる。あるいは、このような奇態を呈した表現は『真言七祖像』行状文や『益田池碑銘』『綜芸種智院式』を書いた空海でなければ書くことができなかったかもしれない。つまり空海真筆の『四体心経』があつて、祖師崇敬者が模写本をつくる際に、筆癖が顕著に表われたために、字形の崩れた拙劣な書を書いたとも考えられる。

三、文様及び料紙の装飾の面から

広の本紙天地に描かれた唐草文様及び料紙の装飾の時代性について、

上智大学教授江上綏氏にたずねたところ、後に施されたという可能性がないともいえないが、広に近いものとして建仁(一一二〇―一一三三)・元久(一一四四―一一五五)のころ書写されたと考えられる『慈光寺経』の『法華経』(巻九)の「人記品」に類例が見られるという。それは、本文料紙の経文の部分に銀地に、界線の天地を金地にして色分けしている。銀地の部分には巻末に細い線の唐草文様が描かれている。

また、長寛二年(一一六四)に書写された『平家納経』の「勸発品」表紙、「囑累品」本紙の天地界、「信解品」「薬王品」「人記品」「無量義経」の見返及び『平家納経』の書写年時より少し古いと考えられる『久能寺経』の「譬喻品」「方便品」の表紙、「法師功德品」本紙の天地界等に描かれた唐草文様にも近いものを感じられるという。それ故、唐草文様及び界線の天地と経文の部分の色分けの仕方から見て、十一世紀以前の遺品はなく、広の文様及び料紙の装飾は九世紀の空海在世中まで遡ることはできないという。

結 語

広は、字形が崩れていて筆力が乏しく、その上十分に洗練されていない。更に空海の書と相違する書風の文字が多く見られる。それ故、筆者を空海とすることは無理で、別筆であること明白である。また文献面から見ても、文様及び料紙の装飾の面から見ても空海時代をはるかに下ると考えてよいようである。博も書法面及び文献面から見ても

と同一であるので、これも空海の真筆とは認められず、別筆であること明白である。

〔付記〕

この拙稿をなすにあたり前国士館大学教授・文学部長春名好重先生にご指導を賜り多大な恩恵を蒙った。記して感謝の意を表することとする。

（本学専任講師・国語国文学）

<p>實 實 實</p> <p>三・27 開 一</p>	<p>實</p>
<p>多 多 多 多</p> <p>三・20 灌・II 開 一</p>	<p>多 文</p>
<p>詒 詒 詒</p> <p>三・20 三・27 開 龍</p>	<p>詒</p>
<p>欠 欠 欠 欠</p> <p>三・20 開 一 惠</p>	<p>欠</p>
<p>リ リ リ</p> <p>三・20 開 一</p>	<p>リ リ</p>

A

能

隨形好一、福德資糧一、
 拉果位演說瑜伽二乘
 荼羅三昧耶法門事業以
 如上所說各、外劑各不
 所謂自性身受用身變
 是能作損利樂一切有情以
 覺及諸外道名為瑜伽

三・20

A

能 智

風・1

不

智

智

不

智

三・20

<p>  三・22 </p> <p>  灌・II </p> <p>  善 </p> <p>  龍 </p>	
<p>  三・27 </p> <p>  開 </p>	
<p>  三・22 </p> <p>  開 </p>	
<p>  三・22 </p> <p>  風・3 </p>	
<p>  三・20 </p> <p>  開 </p>	

A

<div data-bbox="342 238 416 333"></div> <div data-bbox="338 348 408 380">三・26</div> <div data-bbox="342 399 416 466"></div> <div data-bbox="338 481 408 514">三・20</div> <div data-bbox="342 523 416 599"></div> <div data-bbox="338 609 408 643">三・22</div> <div data-bbox="342 656 416 733"></div> <div data-bbox="338 742 408 774">三・22</div> <div data-bbox="450 308 505 342">行書</div> <div data-bbox="463 390 490 618"></div> <div data-bbox="450 656 505 691">草書</div> <div data-bbox="551 238 678 485"></div> <div data-bbox="577 495 645 527">灌・Ⅲ</div> <div data-bbox="557 561 678 714"></div> <div data-bbox="573 729 637 763">灌・Ⅰ</div>	
<div data-bbox="342 856 416 952"></div> <div data-bbox="350 974 420 1007">三・14</div> <div data-bbox="477 818 591 999"></div> <div data-bbox="530 1020 588 1052">風・1</div> <div data-bbox="672 847 745 980"></div> <div data-bbox="676 984 740 1018">灌・Ⅱ</div> <div data-bbox="786 856 846 961"></div> <div data-bbox="782 974 848 1009">灌・Ⅱ</div> <div data-bbox="342 1037 416 1113"></div> <div data-bbox="350 1132 420 1165">三・14</div> <div data-bbox="463 1066 611 1285"></div> <div data-bbox="522 1311 583 1346">風・3</div> <div data-bbox="692 1056 853 1285"></div> <div data-bbox="760 1306 794 1338">開</div> <div data-bbox="342 1209 416 1285"></div> <div data-bbox="350 1290 417 1323">三・20</div>	
<div data-bbox="356 1475 423 1551"></div> <div data-bbox="346 1574 417 1608">三・27</div> <div data-bbox="490 1408 638 1608"></div> <div data-bbox="533 1622 567 1654">開</div>	

A

A	<p>  三・20 </p> <p>  三・26 </p> <p>  三・20 </p> <p>  灌・II </p> <p>  風・3 </p> <p>  一 </p> <p>  一 </p>	<p>  </p>
B	<p>  三・20 </p> <p>  一 </p>	<p>  </p>
	<p>  三・20 </p> <p>  一 </p>	<p>  </p>
C	<p>  三・20 </p> <p>  三・20 </p>	<p>  不 </p> <p>  </p>

度 度

三·22

開

夜

若

三·22

美

三·26

子

灌
・
Ⅱ

等

灌
•
II

;

灌
•
II

乃

開

4



不

子

空

三・20

空

風・1

空

不

空

智

空

子

三·26

方

開

5





	<p>揭 揭 揭 揭</p> <p>三・23 風・1 善</p>	
	<p>提 提 提 龍</p> <p>三・20 開</p>	
D	<p>是 是 是 是</p> <p>三・20 開 智</p>	
	<p>塘 塘 塘 塘</p> <p>三・20 灌・Ⅲ 不</p>	
	<p>尢 尢 尢 尢</p> <p>三・20 風・3 開</p>	










D	<div> <div>除</div> <div>三・20</div> </div> <div> <div>除</div> <div>灌・Ⅲ</div> </div>	<div> <div>除</div> </div>
	<div> <div>何</div> <div>三・26</div> </div> <div> <div>何</div> <div>一</div> </div>	<div> <div>何</div> </div>
	<div> <div>味</div> <div>三・29</div> </div> <div> <div>味</div> <div>開</div> </div>	<div> <div>味</div> </div>
E	<div> <div>照</div> <div>三・20</div> </div> <div> <div>照</div> <div>風・2</div> </div> <div> <div>照</div> <div>風・3</div> </div>	<div> <div>照</div> </div>
	<div> <div>明</div> <div>三・20</div> </div> <div> <div>明</div> <div>開</div> </div> <div> <div>明</div> <div>一</div> </div>	<div> <div>明</div> </div>









	<p>  三・22 </p> <p>  風・3 </p> <p>  開 </p> <p>  智 </p>	<p>  </p>
	<p>  三・22 </p> <p>  善 </p>	<p>  </p>
F	<p>  三・20 </p> <p>  開 </p> <p>  一 </p>	<p>  </p>
	<p>  三・26 </p> <p>  灌・1 </p>	<p>  </p>
	<p>  三・22 </p> <p>  風・3 </p>	<p>  </p>

	<p>说 说</p> <p>三·22 開</p>	<p>说</p>
G	<p>行書 ———→ 草書</p> <p>咒 咒 咒</p> <p>三·22 三·22 三·22</p>	<p>咒 咒</p>
	<p>道 道 道</p> <p>三·26 善 一</p>	<p>道</p>
H	<p>夢 夢</p> <p>一 一</p>	<p>夢</p>
	<p>識 識</p> <p>三·20 三·22</p> <p>職 惠</p>	<p>識 識</p>

H	<p>羅 三・20</p> <p>羅 三・22</p>	 <p>—</p>	<p>羅</p> <p>羅</p>
	<p>心 三・20</p>	 <p>—</p>	<p>心</p>
	<p>受 三・20</p> <p>受 灌・II</p>	 <p>恵</p>	<p>受</p>
I	<p>切 三・20</p> <p>切 開</p>		<p>切</p>
	<p>𠂇 三・26</p> <p>𠂇 開</p>		<p>𠂇</p>

K		J	
			
<p>善</p>		<p>善</p>	
L			
			
<p>一</p>		<p>善</p>	

O	
 一	
 三・23	
 三・20	
 三・29  三・20	 
 三・20	

M	
 不	
 善	
N	
 一  一  一	  

〇	
<p>觸 三・20</p> <p>觸 三・23</p>	<p>楷書 ↓ 行書</p> <p>觸</p>
<p>諦 三・20</p> <p>諦 三・23</p>	<p>諦 諦</p>
<p>色 三・27</p> <p>色 三・27</p>	<p>色</p>
<p>無 三・20</p>	<p>無</p>
<p>怖 三・27</p>	<p>怖</p>